

佳作

進路希望調査

岩手県盛岡市立厨川中学校

3年 田中 陽菜

中学校3年生に進級するまで、あと3カ月というとき。卒業後の進路希望調査用紙が配布された。中学校に入学してから、3回以上は書いている紙だ。またか、と思いながら、友人たちに進路について聞いてみた。すると、みんな自分の考えを持ち、志望校を決めていた。私はとても驚いた。自分と同じように、友人たちもまだどの高校に進学するのか決めかねている人がたくさんいると思っていたからだ。しかし、考えてみれば、もうすぐ中学校3年生。受験まであと1年しかない。将来について、しっかり考えないといけない時期なのだ。そうは思ったが、志望校よりも先に「私は、将来どのような職業に就きたいのだろう。」という自分自身への疑問がわき上がった。

そして、ついに4月。中学3年生に進級した。でも、私には、大人になって、仕事に就いた自分を想像できないでいた。私はあまのじゃくなところがあるし、相手が自分のことをどう思うのかを想像してしまい、自分から行動する勇気がないという弱点がある。そのくせ、知りたがり屋で、人から憧れられるような特別な人になりたいと思っている。私の心はまだ小さな子どもなのだ。

そんな自分に嫌気が差し、自分を変えたくて学級委員長という仕事をやることにした。学級委員長は、人前で声を出すことが多く、初めは緊張して「今、話したら嫌な顔をされるのでは。」とマイナスに考えてばかりだった。しかし、声を出すと、想像とは違い、みんなは全然嫌な顔をせずに、話を聞いて行動してくれた。それが自信となり、少しずつ自分から行動することができるようになった。勇気を出して良かったと感じた。そして、このクラスの一員で良かったとも思った。

そして、季節は夏。中学校生活最後の夏休みだ。期間中には、高校の学校説明会がたくさん行われる。高校が身近になり、将来について本気で考えなくてはならない時期になっていることを改めて感じた。

幼稚園や小学校のときは、将来なりたい職業がたくさんあったのに、今は一つもないなんてと苦笑した。小さい頃になりたかったのは、医者や弁護士、天文学者など。理由は、どれもかっこいい、楽しそうといった単純なものだ。現実性が乏しく、今はその仕事に就きたいとは考えていない。

そんな中、一つ、自分が将来なりたいと強く思える仕事があったことを思い出した。小学校の先生だ。小学4年生の頃、二分の一成人式で、将来の夢につ

いて書いた作文を発表したときに書いたことだ。その後、なりたい職業がいくつも変わったが、今、考えてみると、自分に適した職業だと思う。

私が好きな小さな子どもたちと触れ合える。自分の手で成長する子どもたちの姿を見られる。尊敬していた小学校の先生方を思い出すと、一層気持ちが強くなる。

だが、小学4年生のときになりたかったのに、気持ちが変わった理由も思い出した。先生方は、土日以外、ずっと学校で私たちを見守り、勉強を教え、子どもたちが少しでも居心地よく学校で生活できるように頑張ってくれている。先生方には休みがないのだ。夜遅くまで学校に駐車している先生の車を見て、その仕事の大変さに気付いた。しかも、教師のなり手が減少していて、教師が不足しているとも報道されている。そんなことから、小学校の先生という希望も小さくなっていったのだった。

それでも、今、私は小学校の先生という職業に魅力を感じる。私を知識の面でも、精神面でも成長させてくれたのは先生方だ。今度は私が子どもの成長を手伝う側、応援する側にまわりたい。尊敬していた小学校の先生方のようになりたい。と強く思うようになってきた。

私には、一つのことを長続きできないという悪い癖がある。その癖を直さない限り、自分の希望をかなえることはできない。なりたい自分に近づけないと思うのだ。

私は夏休みから、一人勉強を毎日継続している。今までは、途中で投げ出すことがあったけれど、今度は手を抜かず、積み重ねていきたいと思っている。そんな中、あまり興味のなかった虫、「アリ」を思い出した。アリは少しずつ食べ物を運び、子アリを育てる。アリは努力家だったのだ。塵も積もれば山となる。アリと同じように、努力を積み重ねて、最後に笑える自分になれるように頑張りたいと思う。

次に進路希望調査用紙が配布されたら、こう書くつもりだ。

「小学校の先生という夢に向かって、弱い心の自分に負けずに努力していく。」
進め、私。